〈研究ノート〉

体験学習を通した留学生と日本人学生の国際共修授業

―地域との互恵関係の構築を目指した主体的な学びの場の形成―

林　　翠芳
大塚　　薫
ガルシア デル サス エバ

要　旨

本取組みは体験学習を通して地域文化を理解するとともに、地域の方と触れ合うことにより、学生の目線から地域の課題を見付け、地域の振興を考え、地域の活性化に寄与することを目的としている。また、留学生と日本人学生の国際共修における相乗効果を図るとともに、一連の教育活動を通して、地域とともに生きる自覚を育み、地域の一員として活躍することにより、双方向往来の関係の樹立ひいては地域との互恵関係の構築につながると考えられる。

【キーワード】
地域文化理解、地域交流、地域課題、地域振興、留学生と日本人学生との国際共修、異文化理解

1．はじめに

本研究課題は、地域の大学に通う学生（留学生及び日本人学生）が地域の方との交流や体験的な教育活動を通して高知の文化を学ぶとともに、学生の目線から地域の振興を考え、地域の活性化に寄与することを目的としている。本研究課題の実現、すなわち学生が地域の課題解決に参加するという一連の教育活動を通して、地域とともに生きる自覚を育み、地域の一員として活躍することにより、双方向往来の関係の樹立ひいては地域との互恵関係の構築につながると考えられる。

また、本研究課題で取り上げる体験的な教育活動の手法は、体験・実践を通して学生の企画力、行動力、コミュニケーション力、グローバルな視野等

の基礎的・汎用的能力を培う効果があり、異なる文化、異なる価値観にぶつかる社会体験を通じて、心身ともに鍛えられ、主体的な学びを促し、「教育の質的転換」が期待できると考えられる。

本研究課題は今回で３年目の実施となる。１回目は2017年４月から７月にかけて、地域課題に関する体験型プログラムの一環として高知大学国際連携推進センターの日本語総合コースにおいて「地域文化理解」の授業を実施した。体験学習では①大豊町での茶摘み体験・地域住民へのインタビュー活動&交流、②浴衣着付け体験・ひろめ市場にてインタビュー・日曜市自由見学、③朝倉神社夏越祭り参加・朝倉神社夏越祭り会場にてインタビュー活動の三つの内容で構成され、受講生は留学生のみであり、体験学習型授業の構築、アクティブ・ラーニング型授業の構築を柱に据えた。２回目は2018年10月から12月にかけて高知大学の正課の授業として共通教育の社会分野科目において「地域文化理解」の授業を開講し、留学生のみならず日本人学生も加わり、留学生と日本人学生の国際共修型授業の構築に向けて、体験学習活動を中心に据えた授業を展開した。体験学習では①安芸桜ヶ丘高校、安芸高校の生徒との交流・昼食作りを通した地元の方との交流・高校生による観光ガイド、②高知城歴史博物館&高知城見学･日曜市見学･ひろめ市場でのインタビュー活動、③大豊町での餅つき体験・地域住民へのインタビュー活動&交流の三つの内容で構成され、留学生と日本人学生の国際共修による体験学習型授業の構築を柱に据えた。授業では単に体験授業を組み入れるだけでなく、事前・事後の学習のほか、体験学習において受講生（留学生及び日本人学生）自ら地域の方と接するようにインタビューを仕掛けるとともに、受講生が地域の方との交流や体験活動を通して地域の活性化について考えることに重きを置いた内容であった。最終発表及び最終レポートは「私が考える高知の地域振興」、「高知観光発掘」の二つの課題について考えるものであった。

３回目は2019年10月から2020年１月にかけて、２回目と同様高知大学の正課の授業として共通教育において「地域文化理解」の授業を実施した。体験学習では①安芸市の高校生へのインタビュー活動＆交流活動・高校生による観光ガイド･振り返り活動（ポスターセッション）、②大豊町での餅つき体験･地域住民との相互インタビュー活動&交流、③城西館（ホテル）＆技研製作所見学及び技研製作所社員との交流＆インタビュー活動の三つの内容で構成された。

３回目は１回目と２回目で展開した内容の見直し並びに充実を図り、担当

者同士の切磋琢磨に加え、交流先担当者とも交流活動の内容について見直しを重ね実施された。また、最終発表並びに最終レポートは、新たな取組みとして設定した企業見学という３回目の体験学習を中心に、①「高知の伝統的な産業を活用して、さらに地元を活性化させる方策を考える」、②「高知の産業を振興させるための取組みを考える」の二つのテーマから一つ選び、発表並びに考察を行い、１回目と２回目から視点を変えて考えてもらう内容であった。

体験学習の一環として行われた企業見学は課題を考えるヒントとなるべく企画されたものであり、また、将来的には高知に就職するきっかけになるという狙いも込められている。

２.「地域文化理解」の授業概要

「地域文化理解」の授業は、2019年度第２学期に高知大学の共通教育科目「地域文化理解」の授業として「地域の方との交流や体験活動を通じた教育活動を通して、受講生（留学生及び日本人学生）に地域課題を理解してもらうとともに学生の目線から地域の振興を考え、地域活性化の糸口を探ることを目的」に開講された。16コマの授業において、高知地域の紹介の講義時に受講生に目的意識を持ってもらうために、授業担当者より高知県の概況紹介・土佐料理を中心とした日本料理に関する講義を行うとともに、ビジターセッションとして、学生団体「コンパス」が地域と一体となって行っている活動内容を紹介してもらった。また、高知県商工労働部雇用労働政策課並びに工業振興課の職員をお招きし、高知県の地場産業と製造業を中心にその現状についての講義にご協力いただいた。これらは、いずれも受講生自らが高知県の地域活性化のためにどのように貢献できるかを考えてもらうきっかけとするためである。

体験学習は三回実施し、体験学習の前に事前学習、体験学習実施後にグループごとに活動の振り返り、情報共有、よかった点・反省点等を話し合い、また各自紙ベースによる振り返りシートを提出してもらった。振り返りシートの提出は、授業の一環として組み入れ、活動中の感想等を含め体験活動ごとに受講者全員に課した。各体験学習時には、地元の方との交流を促し、地域事情の理解を深めるためにインタビュー活動を実施した。その事前準備としてインタビューシートを配布し、インタビューの仕方やインタビュイーに対する挨拶、質問の回答に対する受け答えなどについて説明した後、グループ

ごとにインタビューをしあい、設問内容を考案する予行練習を行った。また、体験学習実施後には、グループに分かれてインタビュー活動で得た回答内容をグループのメンバーで共有しあった。

なお、本授業は留学生と日本人学生の共修を一つの柱として据えており、教室での協働学習並びに校外での体験学習では留学生と日本人学生が共に学習内容を考え、共に活動できるように、グループごとの活動を中心に据えた。そして、それぞれのグループの日本人学生がグループリーダーの役割を担った。

近年、国際共修に関する授業展開及び実践研究が増えてきており、佐藤他（2011）では、「国際共修とは，単に留学生と日本人が机を並べて，同じ科目を履修するだけではなく，意図的な教育介入により，言語・文化背景の異なる学生同士が他者を理解し，己を見直し，新しい価値観の創造を自己成長へとつなげる学習体験である」と述べている。本授業で行う一連の活動は、佐藤他（2011）の理念に従い、留学生と日本人学生の国際共修の相乗効果を最大限に引き出すべく、教室での協働学習並びに校外での体験学習では留学生と日本人学生が共に学習内容を考え、そして共に活動できるように、グループごとの活動を中心にしたものであった。

授業は＜表１＞「『地域文化理解』の授業シラバス」の通り実施された。

なお、本授業を受講した留学生は17名であり、内訳としては、中国が12名、台湾が２名、韓国が２名、インドネシアが１名である。また、日本人学生は７名で、うち高知県内出身者が１名、高知県外出身者が６名である。

＜表１＞　「地域文化理解」の授業シラバス

実施日	授業内容	実施場所
10.02	協働学習　オリエンテーション、事前アンケート調査	学内（教室）
10.09	協働学習　講義(1)授業担当者による高知地域に関する講義 インタビュー活動の準備　10/20の体験学習の準備	学内（教室）
10.20	体験学習（交流）①アイスブレーキング（レクリエーション活動を通しての交流活動・高校生へのインタビュー活動・グループ内の役割決め） ②グループワーク「昼食作り」高校生と昼食を交えて交流 ③高校生による観光ガイド ④振り返り活動（ポスターセッション）	学外（安芸市）
10.23	協働学習　①学生団体「コンパス」代表による地域活動の紹介 ②10/20の体験学習の振り返り	学内（教室）
11.06	協働学習　講義(2)授業担当者による日本料理に関する講義 インタビュー活動の準備　11/10の体験学習の準備	学内（教室）
11.10	体験学習　①地域文化学習　　②餅つき体験 ③地域住民との相互インタビュー活動・交流	学外 （大豊町立川地区）
11.13	協働学習　①11/10の体験学習の振り返り　②大豊町の地域住民へのお礼状の書き方講義・実践　③12/11の体験学習の準備	学内（教室）
12.04	協働学習　講義(3)高知県庁職員による高知地元産業に関する講義	学内（教室）
12.11	体験学習　①城西館（ホテル）見学 ②技研製作所見学　③技研製作所社員との交流＆インタビュー	学外 （高知市内）
12.18	協働学習　①12/11の体験学習の振り返り ②ブレインストーミング法によるグループ発表の準備	学内（教室）
01.15	グループ発表 テーマ１：「高知の伝統的な産業を活用したさらなる地元活性化の提案」 テーマ２：「高知の産業を振興させるための取組みの提案」 事後アンケート調査	学内（教室）
01.22	レポート提出 テーマ１：「高知の伝統的な産業を活用したさらなる地元活性化の提案」 テーマ２：「高知の産業を振興させるための取組みの提案」	学内（教室）

３．体験学習の概要及び評価

3-1 安芸桜ヶ丘高校・安芸高校生徒との交流活動

高知県東部の中核都市である安芸市で行われた体験学習は、「地域の魅力再発見」をテーマに安芸桜ヶ丘高校と安芸高校の生徒との交流活動を主軸に

行われた。まず、安芸桜ヶ丘高校の体育館にて高校生と大学生が大きな円となり座り、安芸高校の生徒から安芸市と安芸高校の紹介、安芸桜ヶ丘高校の生徒から安芸桜ヶ丘高校と近隣の町の紹介があった。その後、各グループで自己紹介が行われメンバーの名前を覚えつつ、グループでの役割分担を相談した。そして、安芸高校の生徒が中心となり、レクリエーション活動として「４グループ対抗クラフープくぐり」や「○×クイズ勝ち抜き戦」が行われ、アイスブレーキングが行われた。その後、１対１で大学生から高校生へのインタビュー活動が30分程度行われた後、４グループに分かれ「パスタタワー」を作成し高さを競いあった。昼食では、「うどん」をセルフサービスで盛り付け、安芸桜ヶ丘高校の生徒が作ってくれた田舎寿司とマンゴージュースを受け取り、食事を取りつつ交流を深めた。昼食後、三菱財閥の創始者で地域の偉人である岩崎彌太郎の生家を訪れ、地域のボランティアガイドから説明を受けながら見学をした後、安芸桜ヶ丘高校の生徒の案内で安芸市の名所である野良時計や武家屋敷、後藤邸を観光した。

その後、再び安芸桜ヶ丘高校に戻り４グループに分かれて地域の魅力を再発見し、地域の振興を考えるべくグループワークが行われた。具体的には、一日の活動を振り返り安芸市が地域おこしの面で抱えている課題を踏まえ、その改善策としての地域振興にふさわしい漢字一字を各グループで選択し、それを選んだ理由を皆の前で発表するポスターセッションが行われた。それぞれのグループが選んだ漢字は発信の「発」、注目の「注」、最も必要なものである「金」、若者の「若」であった。地域の課題としては、「交通の便が悪い」、「若者や観光客が少ない」、「遊べる場所が少ない」、「少子高齢化が進行している」、「地域の魅力のPRが不十分」等が挙げられた。それを改善するために地域の食材を活用したグルメや歴史的文化施設のPRを進め、交通面でも自転車レンタルや一日観光ツアーを考案したり、ゆるキャラやスタンプラリー等を使った発信手段を提案したりしていた。その後、全てのグループの発表を聞いた各人が相互評価を行い、インスタ映えを意識したゆるキャラを使った観光地のPRや大河ドラマの誘致、スタンプラリーによる観光客の呼び込み等にエネルギーを「注」いだ提案をしてくれたBグループへの投票が最も多いという結果となった。

後日受講生から提出された振り返り（シートの一部５段階評価）を＜表２＞に示す。＜表２＞から読み取れるように、項目４、６、８を除き、その他の項目は平均値が４ポイント以上を得ており、初回の活動としてはある程度の

満足度を示している。特に、項目２のインタビューした相手に対する理解、項目７、10の一連の高校生との交流活動において高い評価が得られた。

＜表２＞　安芸桜ヶ丘高校・安芸高校生徒との交流活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	日本人学生平均値	留学生平均値	平均値
1	高校生との交流で自己紹介ができたか	10	8	5	0	0	4.3	4.1	4.2
2	インタビューした相手のことがよく分かったか	11	9	2	1	0	4.3	4.2	4.3
3	インタビューを通して、高校生とうまく交流ができたか	9	11	3	0	0	4.2	4.1	4.2
4	今回の高校生との交流で安芸市のことがよく分かったか	4	8	9	2	0	3.6	3.5	3.6
5	今回の活動を通して、（他の）留学生との交流が深まったか	7	13	0	2	1	4.3	3.8	4.0
6	今回の活動を通して、（他の）日本人学生との交流が深まったか	6	5	12	0	0	3.6	3.7	3.7
7	活動評価①高校生との交流（インタビュー活動・ゲーム）	12	7	4	0	0	4.3	4.1	4.4
8	活動評価②料理体験	4	9	7	3	0	3.6	3.1	3.7
9	活動評価③高校生による安芸市ツアーガイド	12	5	2	4	0	3.3	4.3	4.0
10	活動評価④高校生とのグループワーク（振り返り活動）	11	11	0	0	0	4.5	4.2	4.5

注１：５段階評価
　　よく分かった　←　　５・４・３・２・１　→　よく分からなかった
　　よくできた　　←　　５・４・３・２・１　→　上手にできなかった
注２：１名が欠席のため、上記回答は１～９は23名分、また、10は１名無記入のため22名分

その他、記述のみの設問としては、「安芸市をより活性化するには何がポイントか」、「安芸市の観光について、どのようなところを改善したほうがよいか」、「安芸市の観光資源について何か提案があるか」、「今回の活動で何か困ったことがあったか」、「今回の体験学習で学んだこと、感じたことは何か」を設定した。

「安芸市の活性化のポイント」については、「若者が今後も住みたい、働きたいと思う住・就職環境を構築すること」、「より若い人を呼び込み、若い人の流出を防ぐ。Uターンを望む」、「観光を仕事にする人を増やす（又は増えるような取り組みをする）」、「観光産業に力を入れることがポイントだと思う」、「安芸市への宣伝を高めることがポイント」等のアイディアが寄せられ、活性化には若者人口を増やすこと、また、安芸市ならではの魅力を県外へ発信するという提案もあり、安芸市での一日の活動を通して気付いたことが記述されていた。

「安芸市の観光の改善」については、「安芸市観光に特化した観光案内バスを設けるとよい」、「ホットスポットを作る」、「やはりSNSが大事！もっとSNSを利用してPRするといい」、「安芸市のマスコットを生かしてPRする」、「一日パスや観光客向けのキャンペーンを増やす」、「豊かな自然を利用したヒーリング村になってほしい。ゆず体験による子ども客の誘致も良さそうだ」、「途中で見た海はすばらしい。ビーチに関する施設を整えよう」等の提案があった。

「安芸市の観光資源」については、「川を使った自然体験アクティビティを設ける」、「海（beach）を利用した岩崎彌太郎とのコラボレジャー（顔写真付きのすべり台）」等の具体的な提案も見られた。

その他、困ったこととして、活動時間が短かったのが少し残念というメッセージが寄せられ、有意義な交流が行われたことが窺えた。

3-2 大豊町の交流活動

大豊町立川地区における地域住民との交流活動は地域住民並びに大豊町町役場、高知県産業振興推進部の協力を得て実現したものであり、当日は「伝統文化の体験・学習や地域住民との交流」をテーマに行われた。現地（立川刈谷集会所）到着後、まずオリエンテーションが行われ、地域と留学生それぞれの代表の挨拶が行われた後、地域の方から餅の歴史や餅つきの仕方についての話があり、その後、餅つき体験が行われた。昼食としては体験で作られたお餅の試食と地域の食材を用いて地域の方が作ってくださった昼食をいただいた後、留学生から地域の方へのインタビューを実施した。その後、地元の方から参勤交代の歴史等について説明を受けながら立川番所を見学した。また、今回は地域の方との交流を深めるために、立川番所見学後近くの御殿茶屋にて地元住民から受講生へのインタビューを新たに取り入れ、受講生たちも自分の出身地や自国の文化について紹介するなどの交流会を実施した。

＜表３＞の「振り返りシート」の活動評価で読み取れるように、項目４と７を除き、その他の評価はいずれも４ポイント以上になっている。特に項目８、９の体験学習並びに地域との交流に対する満足度が高く、インタビューを通しての交流活動が功を奏したと考えられる。今回特に地元の方からもインタビューを受けるという双方向による質問時間を設け、交流に時間をかけたことが相互理解に繋がったと考えられる。項目４の評価がやや低めであるが、「知りたいことがインタビューで伝わってきた」のようなコメントがある

一方、「ときどき分からない言葉がある」、「少し話がくいちがっていた時があった」とのコメントもあり、地元の方が話す方言が障害になっていたことが一つの理由として考えられる。

＜表３＞　大豊町の交流活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	日本人学生平均値	留学生平均値	平均値
1	大豊町の地元の方との交流で自己紹介ができたか	8	13	1	0	1	4.5	4.0	4.1
2	インタビューした相手のことがよく分かったか	12	11	0	0	0	4.8	4.4	4.5
3	インタビューを通して、地元の方とうまく交流ができたか	7	15	4	0	0	4.0	4.3	4.2
4	今回の大豊町の地元の方との交流で大豊町のことがよく分かったか	2	17	4	0	0	4.0	3.8	3.9
5	餅つきの話や餅つき体験により日本の文化がよく理解できたか	14	6	2	1	0	4.4	4.5	4.4
6	今回の活動を通して、（他の）留学生との交流が深まったか	11	9	2	1	0	4.6	4.1	4.3
7	今回の活動を通して、（他の）日本人学生との交流が深まったか	6	12	3	0	2	2.6	4.2	3.8
8	活動評価①餅つき体験	20	3	0	0	0	4.6	4.9	4.8
9	活動評価②大豊町地元の方との交流（インタビュー活動等）	14	9	0	0	0	4.1	4.7	4.6
10	活動評価③立川番所見学・地元の方による参勤交代の歴史の話	7	11	4	0	0	4.2	4.1	4.1

注１：５段階評価
　　よく分かった　←　　５・４・３・２・１　→　よく分からなかった
　　よくできた　　←　　５・４・３・２・１　→　上手にできなかった
注２：１名が欠席のため、上記回答は１～９は23名分、また、10は１名無記入のため22名分

その他、記述のみの設問としては、「大豊町をより活性化するには何がポイントか」、「大豊町の観光について、どのようなところを改善したほうがよいか」、「大豊町の観光資源について何か提案があるか」、「今回の体験学習を振り返って感じたこと、思ったことは何か」等があった。

「大豊町をより活性化するポイント」については、「移住とかではなく、まずは来てもらって大豊町を肌で感じてもらうことがポイント。そのために、いかにして発信していくかが重要」、「自然を利用してもっと民宿スポットを作る」、「若者に対する働く場所の数を増やすこと」、「中山間地域特有の良さを広めること。移住者が定着してもらえるように対策を考えること」等のコメントが寄せられ、人を増やす、特に若者人口を増やすには、大豊町の良さを知ってもらうこと、また若者が定住できる職の確保が重要とのコメントが多かった。

「大豊町の観光改善」については、「大豊ICを出たくらいから、看板やのぼりなどを使ってPRするとよい」、「観光地がどこかパッと見で分からなかったので、もっと目立つようにしたらいい」、「村へのアクセスは狭すぎて危険だった。まず、最初にすべきことは、道を整備することだ」、「地元のお土産も売ったほうがいい」、「道しるべが少ない」等のコメントがあり、大豊町へ行く道しるべや看板、のぼりを活用した観光地への誘致等の提案が多かった。

「大豊町の観光資源への提案」については、「空き家が多数ということだったので、空き家を活用してカフェや民宿があるとよい」、「空き家を活用して、民宿にして、もっと観光客を引きつける宣伝力があったほうがいい」、「木が多いから、紅叶巡る地を作ろう」、「他のイベントと一緒に開催したほうがいい（例えば、音楽祭）」、「自然を生かした観光産業や農作物の収穫体験もいい」、「観光資源が限定的なため、もっといろいろな体験活動と一緒にテーマにまとめてPRするといい」、「大豊町の菜園や果樹なども利用し、果物と野菜を摘む体験ができる案内コース」等の提案があり、空き家の活用、体験型観光等の提案はアイディア溢れるものであった。

「今回の体験学習を振り返って感じたこと、思ったこと」については、「少子高齢化というのは普段生きていても多少は感じるが、改めて山間地域にいくと顕著に見られた。その上で大豊町のすばらしい自然や食材を人々にいかにして発信して知ってもらうかが必要だと思った。私たちがこのような授業で直接行くことはとても意味があると感じたが、行って終わりにしないことがより重要だと痛感させられた」、「大豊町は名前も知らない場所だったが、実際に行ってみて交流して好きな町となった。今回の実習に参加できてよかった」、「今回の体験学習は本当にいいと思う。いろいろな文化や生活などが勉強になった。実は、大豊町の地元の方をうらやましい思いがある。毎日自分がすきなことをして、ゆっくり暮らしいいなと思う。高齢者だが、明るくてよくしゃべる。そのような生活にあこがれる」、「留学生と日本人学生が仲良くなったと思う。感謝の気持ちを込めて、この体験学習がすばらしい」、「ひとつの地域を活性化したいなら、ひとりの力では足りない。全員が一体になって、ひとりが前でひっぱって、同じ方向に向かって努力すれば、きっと誰かの心を感動させることができる。大豊町の皆さんは本当に地元を愛している。そして、人との接触を大事にしている」、「悩みがあったら、お年寄りと相談して、やはり心も癒された。そして、台湾からの学生がここで民泊したことを聞いて、『民泊』はいいアイディアだと思う」、「みんなが親切で、

純朴だと思う。日本の学生と協力してインタビューした時も多くの知識を得た。地元の人たちはたくさんのことを話した。今回の経験は忘れられないと思う。次回のイベントが楽しみだ」等の感想が寄せられ、体験学習に対して高評価が多かった。また、「静かでのんびりとした村に平和な人々がいてよかったと思ったし、後で生活に疲れたら行きたいと思った」と、のどかな生活を羨むような感想も寄せられた。彼らが将来Iターンの一員になることを願い、地元の活性化に繋がれば、まさに体験学習の醍醐味と言えよう。

また、体験学習終了後の協働学習では、今回新たな取組みとして、受講生全員にお礼の手紙を書かせた。手紙では、「日本人の私でも餅つきを体験するのは初めてで、つきたてのお餅は格別でした。また、昼食では大豊町の郷土料理を頂き、普段なかなか口にできないものを食べながら食を通して大豊町を知ることができました」、「自分はまだまだ勉強不足で立川地区は～すべきだとか～したら良いということはなかなか思いつきません。移住の点でも役に立つことはできませんが、僕の所属している学部は地域の行事に参加することが大好きなので、行事で人が足りない時はぜひ言ってください」、「地域の方との交流では普段聞けないことや自分から聞きづらいことまでお話いただけたこととても感謝しています。想像していたより大豊町の方々は高齢化や現状に対してとても前向きに考えられていて、自分の考え方を改める機会になりました。活動の中でも皆様の活発に動かれる場面を見て、自分もあのようになりたいと思いました」、「日本に来てからずっと町で生活しています。大豊町のようなところにいったのは初めてです。地元の方々はとても親切です。皆様は地元について深い感情を持っています。今回の体験を通して、大豊町の魅力を体験しました。自給自足の快適な生活にあこがれます。チャンスがあれば大豊町で長い休みを過ごしたいです」等の内容が書かれており、体験学習を通して高齢化している大豊町の現状を知り、そして自分にできることを考えるきっかけになったのではないかと思われる。

3-3 企業見学

企業見学は高知県中小企業団体中央会による全面的なサポートの下、株式会社城西館及び株式会社技研製作所の協力を得て実現したものである。＜表１＞のシラバスに示した通り、学期当初より①「高知の伝統的な産業を活用したさらなる地元活性化の提案」、②「高知の産業を振興させるための取組みの提案」の二つのテーマを受講生に提示し、最終発表並びに最終レポートは

上記二つのテーマから一つ選び、発表並びに考察を行うことになっているため、体験学習の一環として行われた企業見学は課題を考えるヒントとなるべく企画されたものであり、また、将来的には高知に就職するきっかけになるという狙いも込められている。

企業見学を実施する前の週に、ビジターセッションとして、高知県商工労働部雇用労働政策課並びに工業振興課の職員をお招きし、高知県の地場産業と製造業を中心にその現状についての講義にご協力いただいた。講義を通して「高知ならではの産業について知るようになった」、「実際に県の政策やデータを見ることが少なく、活動とその成果を知れた」、「全然知らなかったことが多かったので参考になった」等の感想が寄せられた。

企業見学は、城西館では副支配人に企業の理念や目標、同業界との差異等のお話をうかがった後、２つのグループに分かれてホテル内の結婚式場や皇室の宿泊される場所、バリアフリーの整った部屋等各施設の説明を聞きながら見学を行った。技研製作所では、企業の概要の動画を見た後、最新の技術で開発された駐車場や現在までの掘削機の変遷が展示されている博物館を見学した。その後、若手社員から企業の経営理念や強み、開発した環境に優しい掘削技術に関する説明があり、技研製作所に関するクイズが出され、企業に関する理解が深められた。その後、３グループに分かれて社員とのインタビュー活動が行われ、交流した。

企業見学活動についての「振り返りシート」の評価は＜表４＞に示す通り、項目９、10、11の活動評価に対する満足度が高かったことが窺える。技研製作所の社員との交流については、通常のインタビュー項目に加え、OB・OG訪問をイメージした質問内容を加えて行ったが、概ね良い評価が得られた。「年齢も近く、大学の頃に感じたことなどを教えていただいた」、「いろいろな情報を真面目に答えてくれて本当にありがたいと思うほど、交流ができた」のようなコメントがある一方、「時間が限られていたし、使った言葉もむずかしいし、あまりしゃべれなかった」、「終わる時少し焦りを感じた」とのコメントの通り、限られた時間の中での交流・インタビュー活動ではあったが、社員の方の対応に対する満足度が高く、時間的に余裕があればより深い交流ができたのではないかと思われる。

＜表４＞　企業見学活動における評価

NO	振り返りシート内容	5	4	3	2	1	日本人学生平均値	留学生平均値	平均値
1	①今回の企業見学で城西館（ホテル）のことがよく分かったか	11	10	1	0	0	4.6	4.4	4.4
	②以前から城西館のことを知っていたか	0	0	5	7	10	2.4	1.5	1.7
2	①今回の企業見学で技研製作所のことがよく分かったか	6	13	2	1	0	4.4	4.0	4.0
	②以前から技研製作所のことを知っていたか	0	0	1	0	21	1.0	1.1	1.0
3	①チャンスがあれば、城西館に就職したいと思うか	0	2	6	6	8	1.8	2.1	2.0
	②チャンスがあれば、技研製作所に就職したいと思うか	0	2	7	6	7	1.4	2.4	2.1
4	技研製作所社員との交流で自己紹介がよくできたか	7	11	4	0	0	3.6	4.2	4.1
5	インタビューした相手のことがよく分かったか	8	12	2	0	0	4.0	4.3	4.2
6	インタビューを通して、社員の方とうまく交流ができたか	5	12	4	1	0	3.6	4.0	3.9
7	今回の活動を通して、（他の）留学生との交流が深まったか	4	9	6	3	1	3.6	3.6	3.6
8	今回の活動を通して、（他の）日本人学生との交流が深まったか	2	5	10	3	1	3.4	3.1	3.1
9	活動評価①城西館の見学	16	5	1	0	0	4.2	4.8	4.6
10	活動評価②技研製作所の見学	15	6	1	0	0	4.4	4.7	4.6
11	活動評価③技研製作所社員との交流	12	7	3	0	0	3.8	4.5	4.4

注１：２名が欠席のため、上記回答は１～９は22名分、また、８は１名無記入のため21名分
注２：１-②、２-②は、「知っていた」、「名前だけ知っていた」、「知らなかった」の３段階評価
注３：３-①、３-②は「強くそう思う」、「思う」、「ややそう思う」、「思わない」の４段階評価

項目１と２は企業見学前と後のそれぞれの企業に対する認知度及び理解度を尋ねるものであったが、城西館の場合、大学に近いところにあるため、ある程度知られていたが、技研製作所は大学から離れたところにあるため、ほとんど知られていなかったことが見てとれた。しかし、企業見学を通して高知にも世界的に展開している企業があること、稼働率が極めて高いホテルがあることを認識しただけでなく、両社に対する理解が深まった。そして、それは項目３の両社に就職したいことにもつながり、本授業の狙いである地域の活性化や若者が高知地域の活性化に貢献するという構図ができ、受講生が自らそれを実践することにつなげれば授業担当者として喜ばしい限りである。

その他、記述のみの設問としては、「今回の体験学習で学んだこと、感じたこと」、「今回の企業見学や社員との交流を通して、高知の伝統的な産業を活

用して地元をどのように活性化していけばよいと思うか」、「今回の企業見学や社員との交流を通して、高知の産業を振興させるために、どのような取組みをしていけばよいと思うか」等が挙げられる。

「体験学習で学んだこと、感じたこと」についてであるが、まず城西館に関しては、「皇室の御定宿ということで厳格で格式高さをあちこちで見てとれた。一方で、完全バリアフリーの客室を設けるなど社会のニーズを汲みとって改革を行っていることはすばらしいことだと感じた」、「地域色が強く表れた良い旅館だと思った」、「社員全体は優しく一生懸命お客様に心がけていると思う」、「日本の旅館に新しい認識を持つようになった」、「地元とのつながりを大切にしているホテルさんは初めて見たが、こまかい部分まで考えておもてなしをするのは印象的だ。あとはバリアフリー施設の設置に少し驚いた」、「本当に思いやりのある会社だと感じる。とくに、身体障害者のために作った部屋は非常にいい設計だと思う。私もホテルでインターンシップの経験があったので、そこまで考えるのは本当に珍しい」等のコメントから見学を通して城西館の経営理念に感心したとの感想が多く寄せられた。また、「企業はただ利潤を追求するだけではなく、公共の利益、地域発展にも貢献する努力があった」、「他国の文化を知ることはいいことだが、やはり他の人に説明できるよう地元の知識を深めることも大切だと改めて思った」、「私が勉強したことは他人にサービスしたいなら、自分の仕事に対してまじめに取り組むべきだ」、「城西館の社訓は『褒められて反省、叱られて感謝、全て何事にも謙虚』ということだ。確かに、生活の中では、自分も何事に対しても謙虚な姿を持つべきだ」、「接客という仕事をあらためて考えた。面白そうだ」等から城西館の見学を通して自分自身の価値観等を見直すなどのコメントも見られ、効果的な体験学習であったと思われる。

そして、技研製作所については、「東証一部という会社を根拠付けるかのようにすばらしい最先端技術を間近で感じた一方で、工法の具体的なシステム等も学べた」、「良い労働環境であると感じた。社員の方も就職した理由に明確なものがあってやりがいを感じていらした」、「自転車と車の駐車場はすごく便利だと思う。世界に広めるべきだ」、「世界に貢献できるための努力のひとつは地元のことをどうやって発展できるかという考えが大事だと改めて感じている」等の感想があり、技研製作所の独創的で斬新な技術の高さに敬服の念が寄せられ、世界に通じる技術を持つ企業が高知にあることを見学を通して知ることができた。

「企業見学や社員との交流を通して、高知の伝統的な産業を活用して地元をどのように活性化していけばよいか」については、「全国に商品を売り込み、高知のブランドの知名度を高める」、「城西館などのツアーをして伝統的産業を巡る形式を設ける」、「各企業がもう一度伝統産業について見つめ、取り入れるべき要素を探す。また、地域色を守り、地元の物を大切にすることが活性化につながる」、「伝統的な産業と新しい技術を結び付けて、新しい効果が生まれると思う」、「各社の宣伝をして、若い人に求職のチャンスを提供」、「大手企業とコラボをして、企業の力を借りて地元の魅力を全国へ発信する」、「城西館のように地元の生産品を使ったり、技研のように地域だけではなく全国的に役立ったりし良いイメージを作る」、「土佐和紙は品質が高いが、原料不足、和紙生産者の後継者育成、流通などの問題が存在している。土佐和紙を利用して素晴らしいアート作品を作れば宣伝効果があるだろう」、「高知ならではの魅力をどうやって保ち続けるか、またどうやって生き続けるかを会社ならではの力でそれを発展させるということ」、「観光産業を通じて、観光客に高知の良さを見せて、高知に住みたくさせる。観光客を集めて収入を増やす」、「伝統的な産業に新しい技術を加えて、業界で先頭に立つ（技研のように）、他の産業分野への波及もすればいい」等の高知の伝統産業の活性化につながる提案もあり、受講生それぞれがこのテーマについて真剣に考えた内容であった。また、「正直授業を取る前に高知の伝統（産業）も全然知らなかった」とのコメントもあり、高知の伝統的な産業の魅力を発信することが大事であるとともに、この授業を通して高知の伝統産業を知ってもらうことができたことで授業の初期の目的が達成できたと考えられる。

「企業見学や社員との交流を通して、高知の産業を振興させるために、どのような取組みをしていけばよいか」については、「高知を代表する企業とタッグを組み、魅力等を発信してもらう」、「旅館や商業施設の簡単に手にとれるところに地元特産があると良い。また、万人受けする商品だけでなく、打ち包丁やカサのような美術品やロマン、趣味としての産物を大々的に紹介すると人の目を引きやすい」、「高知の中、高、大学生にもっとこのような企業見学を体験させたほうがいい。彼らは地元の企業について知って、興味を持って、おそらく高知の企業に就職したいと思う」、「外国人人材の取り入れも大事だと考える」、「観光分野において自然景観や体験メニューと歴史資源や食資源などを結び付け、魅力を見せる」、「地元の材料を活用して特産品を作る」、「地域の大学と連携した技術の発展、地域人材を外部に流出させない、

県、企業の努力が必要」等の提案があり、中には高知県がすでに提唱している内容もあり、実行可能なよいアイディアであると思われる。

3-4 体験学習の平均評価

＜表５＞は＜表２＞、＜表３＞、＜表４＞から体験学習の評価の平均値のみを抽出したものである。体験内容により、質問の内容を変えているところもあるが、＜表５＞では共通する部分を中心に挙げている。１の「インタビューの目的の伝達」の平均値はいずれも4.1以上であり、受講生たちがよく頑張ってインタビューの目的を伝え、インタビューに協力してもらったと思われる。

２の「相手に対する理解」と３の「インタビューした相手との交流」は、企業見学「インタビューを通して、社員の方とうまく交流ができたか」の3.9の評価を除き、4.2以上の評価が得られている。特に、大豊町の「インタビューした相手のことがよく分かったか」の項目が4.5と高い評価が得られた。大豊町での地元住民との交流活動はしっかり時間を取って行われたことが相互理解に繋がったと考えられる。一方、企業見学の折の社員との交流は限られた時間の中で７、８名の大人数で行われたため、評価のポイントに若干響いたと考えられる。

４と５に関して、「安芸市」については、「安芸市の課題について高校生から聞くことができた」、「いままで何も知らなかった安芸市のことや抱える問題を知った」等のメッセージがある一方、活動時間や見学先の場所等が限られていたため、ある程度理解できたという感想もあった。また、「大豊町」については、「中山間部で生きている人々の生活を知ることができた」というコメントがあり、交流を通してある程度大豊町に対する理解が深まったと言える。「餅つき体験」については、日本人学生も含めほとんどの学生が初体験であったこと、また、体験学習の前に地元の方よりPPTを用いて餅の歴史や餅つきの道具等が紹介され、餅つきの仕方のコツを伝授していただき、餅つきのプロセスが一通り体験できたことが理解の深化に繋がったと読み取れる。また、企業見学で見学した２社の企業については、見学前までは多くの受講生が見学先の企業について名前すら知らなかったが、見学先では説明を聞きながら見学したため、両企業に対する理解が深まり評価結果に繋がったと思われる。

＜表５＞　体験学習の平均評価

NO	安芸市における体験学習	平均	大豊町における体験学習	平均	企業見学	平均
1	高校生との交流で自己紹介ができたか	4.2	大豊町の地元の方との交流で自己紹介ができたか	4.1	技研製作所社員との交流で自己紹介がよくできたか	4.1
2	インタビューした相手のことがよく分かったか	4.3	インタビューした相手のことがよく分かったか	4.5	インタビューした相手のことがよく分かったか	4.2
3	インタビューを通して、高校生とうまく交流ができたか	4.2	インタビューを通して、地元の方とうまく交流ができたか	4.2	インタビューを通して、社員の方とうまく交流ができたか	3.9
4	今回の高校生との交流で安芸市のことがよく分かったか	3.6	今回の大豊町の地元の方との交流で大豊町のことがよく分かったか	3.9	今回の企業見学で城西館（ホテル）のことがよく分かったか	4.4
5			餅つきの話や餅つき体験により日本の文化がよく理解できたか	4.4	今回の企業見学で技研製作所のことがよく分かったか	4.0
6	今回の活動を通して、（他の）留学生との交流が深まったか	4.0	今回の活動を通して、（他の）留学生との交流が深まったか	4.3	今回の活動を通して、（他の）留学生との交流が深まったか	3.6
7	今回の活動を通して、（他の）日本人学生との交流が深まったか	3.7	今回の活動を通して、（他の）日本人学生との交流が深まったか	3.8	今回の活動を通して、（他の）日本人学生との交流が深まったか	3.1
8	活動評価①料理体験	3.7	活動評価①餅つき体験	4.8	活動評価①城西館見学	4.6
	活動評価②高校生との交流（インタビュー活動・ゲーム）	4.4	活動評価②大豊町地元の方との交流（インタビュー活動含む）	4.6	活動評価②技研製作所の見学	4.6
	活動評価③高校生による安芸市ツアーガイド	4.0	活動評価③立川番所見学・地域の方による参勤交代の歴史の話	4.1	活動評価③技研製作所社員との交流	4.4
	活動評価④高校生とのグループワーク（振り返り活動）	4.5				

６と７に関しては、今回の受講者24名のうち17名が留学生、７名が日本人学生であり、日本人学生数が少ないことから、他の日本人学生との交流機会が自ずと少なくなったこと、また、体験学習では４グループに分かれての行動となり、それぞれの日本人学生が各グループ１～２名の状況であったことも評価係数が低かった大きな理由になっていると考えられる。また、企業見学の折は説明を聞きながら見学していたため、受講生同士が自由に交流できる環境ではなかったことも評価ポイントに表れたとみることができる。

８に関しては、高校生との交流時の料理体験を除きいずれも4.0以上であ

り、体験学習に関する満足度が高いことが窺える。料理体験では、安芸桜ケ丘高校の生徒が「土佐のおもてなし文化」を遺憾なく発揮されたため、十分な体験活動に至らなかった点が評価ポイントに響いたと思われる。

４．グループ発表

最終発表は四つのグループに分かれて、「高知の伝統的な産業を活用したさらなる地元活性化の提案」と「高知の産業を振興させるための取組みの提案」の二つのテーマから一つ選び、体験学習等を通して感じたこと、考えたこと、また調べたことについて地域の産官学の関係者の前で発表してもらった。

Ａグループは「観光産業発掘」をテーマに、まず高知県の魅力と高知県の現状について具体的なデータを示し、その上で「若い世代も外国人も共に楽しめるインスタ映え」する投稿や「自然・体験」を中心として高知県の強みである「歴史」や「食」などが地域で一体的に連携した観光地づくりの必要性を訴えた。そして、事業連携者の支援の促進と新しい観光商品を作り続ける取組みが必要との提案があった。また、国際観光を推進するに当たり、SNSを利用した情報発信や地元の学校を通じた地域の観光事業者の育成、商品の磨き上げをはじめ、研修等の実施により外国人観光客へのおもてなしできる人材やガイド団体の育成を図るとともに、観光産業を支える事業体の強化が重要であると述べた。

Bグループは「高知県の観光に対する提案」をテーマに、台湾人と韓国人を対象に日本の行きたい町アンケートを実施した上で、アンケート結果について分析を行った。まず、台湾人を対象に行ったアンケートでは「ここにしかない食べ物」、「普段見られない自然」、「SNS、テレビ等で紹介された有名な場所」が台湾人観光客を惹きつけるポイントであると分析され、「インフルエンサーを起用したPR」が有効な対策であるとした。一方、韓国人を対象に行ったアンケートでは「韓国からの直航便」、「交通面が便利」、「興味深い観光地」、「観光客が多くいくところ」が人気があると分析され、対策として「定期的な祭りの開催」、「地域的な特徴の活用」、「高知県が持っている名所のPR」という提案があった。訪日客の地方誘致には、まず知ってもらうこと、そして、外国人観光客の目線で観光資源を生かしPRすることが重要であると強調され、グループのメンバーが真剣に課題に取り組んだことが窺えた。

Cグループは「高知県産業発掘」というテーマで、高知の農業、漁業、新エ

ネルギー産業等を中心に発表を進めた。高知県の所得向上、雇用の創出、風土や伝統的文化の保全のため、新しい産業として、１次産業×２次産業×３次産業を一体化した６次産業（１次産業×２次産業×３次産業＝６次産業）という斬新な提案があった。また、高知県の豊富な自然を生かした「新エネルギーの導入」の提案では、新エネルギー導入のメリットとして「環境関連産業の育成、地域産業の開発による利益」、「エネルギーの地産地消と地産外商の実現」、「就職機会の増加」、「海外に依存している化石燃料の消費の抑制」、「地球温暖化の原因となる二酸化炭素（CO_2）の排出量の抑制」が挙げられ、推進するには高知県新エネルギー導入促進協議会、あるいはワーキンググループの立ち上げ等、産学官の連携が不可欠と訴え、大変興味深い提案であった。

Dグループは「高知の産業を振興させるための取組み」をテーマに、町おこしについて提案した。提案①では「いかにして観光客を呼び込むか」に焦点を当て、(a) SNSを用いた宣伝（外国人ユーザーに配慮したツールの利用）、(b) 東京オリンピック・パラリンピックのインバウンドを見越して、東京オリンピック、パラリンピック競技会場周辺における高知県観光案内ブースの設置や広告等の掲示、アンテナショップの有効活用等についての提案があった。また提案②では「高知でのおもてなし」を中心に、「高知港に入港する観光客や高知県に公共交通機関を利用して訪れる観光客に向けたツアーの実施」、「高知県内のグルメなどを一度に楽しめる施設の充実」、「ゲストハウスなどの比較的安価に宿泊できる施設の整備」、「キャッシュレス決済対応店舗の拡大」という具体策が提案された。

以上のような提案を実現するにはCグループでも提案された産学官の連携、そして、地方自治体、県民・市民の協力、民間団体等の協力が不可欠なものが多いが、アイディアや提案自体はいずれも高知地域の振興に繋がるものであると思われる。

５．授業終了アンケート結果

＜表６＞で示したように授業終了時に実施したアンケートでは、項目５と７の受講生同士の交流についての評価を除き、すべて4.0ポイント以上あり、概ね高い評価が得られた。

１の「地域文化理解の授業を受けて、地域文化に対して理解が深まったか」については、「高知の地元の人々と触れ合う機会があった」、「インタビューし

たときに、高知や地元について聞けた」、「普段行けない地域に行けた」、「体験活動を通して様々なことを知れてよかった」、「高知県の産業や問題を通じて自分の地域ではどうなのか考えるきっかけとなった」、「人に高知について説明できるようになった」等の体験学習の有効性が実感できるコメントが寄せられた。

２の「一連の活動を通して、高知の地元の人々との交流はできたか」については、「多くのことを教えてもらった」、「地元の人とたくさんしゃべる機会があった」、「幅広い年齢層の方々とインタビューを行えた」等のコメントが寄せられた。

３の「高知の地元の人々との交流を通して、地域住民への理解が深まったか」については、「高知の地域を詳しく知れた」、「暮らしぶりがインタビューで分かった」、「山間部に住んでいる人の生活が気になっていたので、お話しを聞けてよかった」、「自分と地域の将来を考えていらしたことを体感した」、「大学で会う友達以外の大人の方の意見を聞けた」、「高知の地元の人々にインタビューして、彼らの考えや暮らしを理解した」、「インタビュー、体験活動等を通じて詳しく知ることができた」等のコメントが寄せられ、インタビュー活動が一定の効果を奏したとみることができるとともに、交流の大切さを改めて考えさせられた。

４、５、６、７は受講生同士の交流と多文化への理解についてであるが、「留学生から興味深い話を聞けた」、「日本との違いをよく話した」、「時間外でも連絡を取るようになった」、「協力してグループワークを進められた」、「中国や韓国どんなところか直接聞いたことがなかったので、初めて知ることが多かった」、「留学生の将来や、問題意識について知ることができた」、「同じグループで課題や議論など一緒に交流した」、「新しい発想に触れた」等のコメントが寄せられ、グループ活動等を通して交流が深められ、また留学生と日本人学生の国際共修を通して多文化を理解し自文化への気付きが促され、互恵的な学びが得られたと言える。

９は一連の体験活動並びに事前学習について尋ねるものであったが、①「安芸特産料理体験・安芸観光＆高校生との交流」については、「留学生×高校生×大学生という普段では関わることができない人と関わり合えて面白かった」、「日本の末端地域、過疎地域の同年代の方の意見と求めているもの、地域の現状のずれを知った」、「料理はよかった、観光と高校生との交流も新鮮な体験」等のコメントがあった。②「餅つき体験・立川番所見学＆大豊町民

との交流」については、「全部初体験だったので、とても楽しくて印象的だった」、「皆よかったが、何よりも餅つき体験を初めてしたので記憶に残る」、「大豊町民との交流で本当に年配の方の知恵を感じた」、「今でも大豊町の方々へのインタビューが印象に残っている」等のコメントがあった。また、③「高知の産業に関する講義・城西館・技研製作所への企業見学」についてであるが、「高知の産業に関する講義については、「ぜんぜん知らなかったことが多かったので参考になった」、「実際に県の政策やデータを見ることは少なく、活動とその成果を知れた」、「高知の伝統的な産業や新しい産業を知ることができた」等のコメントがあるように高知県の職員による講義は高知県の産業を理解するのに有意義な事前学習となった。そして、「城西館」の見学については、「興味深い話を聞いた」、「実際に行っている努力が見学を通して感じられた」、「地域に根付く旅館のあり方や地域に貢献されていることが分かった」、「ホテルの見学が印象的で、地域の発展にも貢献する経営理念が興味深かった」、「（ホテルに）入れただけで感動した」、「就職先として非常に魅力的なところだ」等のコメントがあり、受講生が真剣に体験学習に取り組んだ姿が窺えた。「技研製作所」については、「上場企業の社風と地元と企業の両方の姿が見られた」、「最先端の技術が分かった」、「見学を通して高知が世界に誇る企業だと実感した」、「インタビューの時、聞きたいことを全部聞けた」、「高知にもこんな場所があるのかと驚いた。城西館と同様就職先として魅力的なところである」等のコメントがあった。体験学習を通して、多くの受講生が城西館と技研製作所の経営理念に感銘を受け、就職先として魅力的な会社であると感じる受講生もいたことが分かる。

８は「一連の授業の活動の満足度」を尋ねるものであったが、平均評価が4.6と非常に高い評価が得られた。「留学生とたくさんグループワークができて新鮮だった」、「他の学年の方や国の方と交流することは通常あまりない上に地域交流までできた」、「企業見学やグループの発表を通して、本当に勉強になった」、「いろいろな活動を通じて、もっと日本の現状を知ることができた」、「新しい体験が多く、視野が広がった」、「この授業を通して、日本の地域文化について理解が深まった」、「各地域の見学を通じて直接目で見ながら経験したことが本当に良かった」等のコメントがあり、満足度の高さは留学生と日本人学生の国際共修の実践、体験学習の有効性を物語り、体験学習を通して地域文化に対する理解が深まったと同時に、地域の方々と交流ができたことで本課題の取組みが有効であったと言える。

＜表６＞　終了アンケートの評価の平均

NO	内容	5	4	3	2	1	日本人学生平均値	留学生平均値	平均値
1	「地域文化理解」の授業を受けて、地域文化に対して理解が深まったか	12	12	0	0	0	4.1	4.4	4.2
2	一連の活動を通して、高知の地元の人々との交流はできたか	13	9	2	0	0	4.7	4.3	4.5
3	高知の地元の人々との交流を通して、地域住民への理解が深まったか	10	9	5	0	0	3.8	4.3	4.1
4	一連の活動を通して、（他の）留学生との交流はできたか	14	8	2	0	0	4.5	4.4	4.5
5	他の留学生との交流を通して、他文化への理解が深まったか	6	11	4	3	0	4.0	3.7	3.8
6	一連の活動を通して、（他の）日本人学生との交流はできたか	10	7	5	1	1	4.0	4.0	4.0
7	（他の）日本人学生との交流を通して、他文化への理解が深まったか	7	11	2	2	2	2.8	4.1	3.5
8	今回の一連の授業の活動の満足度の５段階評価	18	6	0	0	0	4.4	4.8	4.6
9	①②③の体験活動及び最終グループ発表の満足度の５段階評価								
	① 安芸特産料理体験・安芸観光＆高校生との交流	11	10	2	0	0	4.3	4.4	4.2
	② 餅つき体験・立川番所見学＆大豊町民との交流	19	3	1	0	0	4.4	4.8	4.6
	③ 高知の産業に関する講義＆城西館・技研製作所の企業見学								
	・高知の産業に関する講義について	11	9	1	0	0	4.2	4.5	4.3
	・城西館について	14	6	2	0	0	4.4	4.5	4.4
	・技研製作所について	13	7	2	0	0	4.4	4.5	4.4
	④ 最終グループ発表	10	7	6	0	0	3.7	4.3	4.4

注１：５段階評価
十分　←　５・４・３・２・１　→　不十分
理解が深まった　←　５・４・３・２・１　→　理解が深まらなかった
注２：１～８の項目は24名分、９の体験授業に不参加の受講生がいるため、①と②は23名分、③の高知の産業に関する、城西館・技研製作所への企業見学では講義は21名分、企業見学は22名分、④の最終発表は23名分

その他の記述式質問に対する回答であるが、「授業の取組みとしてのインタビュー調査において困ったこと」については、体験先で地元の方の話す言葉、また地名等で分かりにくいところがあったという数名の意見があったが、特に困ることがなかったと答えた人がほとんどであった。

また、「高知で観光や生活をして困った点」については、交通が不便であることを挙げた人が多かった。また「キャッシュレスができるところが少ない」、「大学の近くに無料WiFiがあるカフェがない」というコメントがあった。高知県は東から西に長く、中心部の高知市内は電車やバスのような交通網が

発達しているが、その他の地域へのアクセスが悪く、通信・交通インフラの整備や公共施設の充実が求められていることが分かる。

さらに、「高知観光・産業の改善点」については、上記の「高知を観光して困った点」と同様、交通の利便性の改善を求めるコメントのほか、情報発信やPRのコメントも多かった。また、「食というのは大きな魅力だと思うので、B級グルメが増えるとさらに人気が出ると思う」、「農林水産業に従事する若者が増えると活性化すると思う」、「いろいろな企業やお店が手を取り合ってツアーを計画する」、「農業や漁業は高知ならではのものもあるので、もっと若い人を取り込むことをしていけばいい」、「体験型観光商品を増やしてほしい」等の提案のほか、「県の政策がものすごくよかった」と高知県の取組みを高く評価するコメントもあった。

そして、「学生の目線から高知の観光・産業資源への提案」については、「JRの一時間あたりの本数を増やせないか」、「地元食材を用いたフレンチや和食等を提供するお店が増えるとよい」、「情報発信が足りてないと思うので、SNSやインフルエンサーなどの利用が有効だ」、「高知ならではの魅力があまり分からないところもあるので、発信していってほしい」、「観光向けのチケットセットの販売」、「伝統的な（土佐）和紙などをもっとアピールしてほしい、高知ならではの名物を人の心に残れるようにしてほしい」、「興味深いイベントの開催」、「独特な商品を開発する」、「農業や観光資源を活用して、新しい産業を作り出す」等の提案があった。

最後に、「その他、気づいたこと」については、「学部的にあまり留学生と関わることがないので、経験できてよかった」、「最近の旅行の形態は景色を鑑賞することに変化している。高知は自然の景色が美しいから、それを活用するのがいい」、「十分県・市職員の方が努力していると思う。簡単になしえないこともある（国際線発着便等）ので、身近にできること（私なら地元に帰ってPR等）もしていきたい」のようなコメントがあった。また、「この地域文化理解の授業を通じて、いろいろ勉強になった。将来日本で働きたい」、「大満足している。日本に来てから、（受けた授業で）一番いい授業だと思う。とりわけ交流が多いことがよかった」、「すべてよかったが、最後の技研製作所の見学は本当に良かったと感じるほど有益な時間だった」と授業を評価してくれるメッセージもあった。そして、授業におけるグループ活動について「活動は大体グループ形式で行われた。もし時々グループ形式に限定しなければ、もっとたくさん友達ができたと思う」という今後の課題として検討すべ

きコメントもあった。

６．終わりに

本取組みは、2017年度に国際連携推進センターの日本語総合コースの授業として「地域文化理解」が開講され、「地域の伝統文化を通じた教育活動を通して、留学生が地域課題を理解するとともに留学生の目線から地域の振興を考え、地域活性化の糸口を探ることを目的」とした活動が展開されてきた。2018年度からは、共通教育の社会分野科目として開講され、留学生と日本人学生との共修授業として実施されている。授業では、グループごとの活動をベースに据え、３回の体験学習を実施しているが、その前後に事前・事後学習を組み入れるとともに、体験学習において受講生自らが地域の方々と積極的に交流し、地域事情の理解が深められるよう2019年度は新たな取組みとして双方向型のインタビュー活動を実施した。また、体験学習実施後にグループごとに活動の振り返り、情報共有、よかった点・反省点等を話し合い、最終的に受講生自らが地域活性化のためにどのように貢献することが可能かを考えられる構成にした。

このような活動を実施した結果、留学生と日本人学生ともに主体的に行動を起こす様子が確認され、異文化理解や言語運用能力、自文化への気づきが促され、互恵的な学びが得られたと言える。

最後に「高知の伝統的な産業を活用したさらなる地元活性化の提案」、「高知の産業を振興させるための取組み提案」の二つのテーマから一つ選び、レポートにまとめてもらった。それぞれのレポートが高知の地域振興を真剣に考える内容となっていた。ここにその一部を紹介する。

＜日本人学生のレポート①＞抜粋

私は、高知文化理解の講義・実習を受け、高知の文化、伝統的産業に興味を持った。高知で有名な伝統的産業といえば、「土佐和紙」、「土佐打ち刃物」、「土佐瓦」、「土佐古代塗」、」「土佐漆喰」、「土佐凧」、「土佐サンゴ」、「竹細工」、「土佐硯」、「陶芸」などである。工芸品以外では、「文旦」などの農作物もそうである。また私は、高知の有名な産業のうちの一つに、「ケンピ」があると考えた。私自身、芋ケンピがとても好きで、よく買って食べているのだが、高知が発祥の地であることは知らなかった。もっと全国区としても知られてもいいはずだ、と考えた。

有名にする方法として、芋ケンピの６次産業化を考えた。６次産業化とは、１次産業である農業生産を行う農家が、２次産業である加工も行い、流通・販売を行う３次産業も行うことを意味する。１×２×３＝６次産業になるということだ。６次産業のメリットは、所得の向上・雇用の創出・風土や伝統的文化の保全・地域の活性化にもつながることだ。高知でおすすめの産業であるといえるだろう。だがデメリットもある。それは、多額の投資、厳格な衛生管理、専門的な知識が必要になることである。それを考慮したとしても、高知でおすすめの産業といえる。芋ケンピを使用した、６次産業化について考えてみた。

まず芋ケンピの材料になるサツマイモを１次産業である農家の方が栽培する。そこでそのまま農家系列の工場などで加工・生産を行い、農家系列の販売所で販売するなどだ。また別の提案例として農家体験を行い、体験した人たちに芋ケンピを作ってもらうツアーなどを作ることだ。詳しく説明すると、１次産業である芋農家でサツマイモを栽培し、そこに３次産業の旅行会社が介入し、ツアーを作り、芋ケンピを作りたいという消費者を呼び込む。そして、参加した消費者がサツマイモを収穫し、芋ケンピを作っている２次産業の場所に移動し、サツマイモに加工してそのまま食べられるようにする。このように６次産業化していく方がいいのではと私は考えた。

このようなツアーがあれば参加したいと思うし、全国の芋ケンピ好きの人たちも同様に参加したいと思うはずだ。以上のことより私は、高知で芋ケンピを使用した６次産業を推奨した。この地域文化理解での講義から、高知の素晴らしい伝統的産業・伝統文化・特産品・歴史・人の温かさを学び取ることができた。だから、高知の素晴らしさが他県の人たちにもっと伝わって欲しいし、知ってほしいと感じた。

＜日本人学生のレポート②＞抜粋

私が提案するのは、花を観光資源とした、観光業と農業を振興させるための取り組みである。

まず高知県の農業は、温暖な気候を利用してビニールハウスによる野菜や花きの栽培が盛んで、全国でも有数の「園芸王国」である。また近年ではさらなる生産性を求めて、次世代型こうち新施設園芸システムの普及も推進されている。今回観光資源として活用する花き園芸については、ユリ類やグロリオサを中心とする球根切り花類など様々なものが生産されている。主な生

産地は東部から西部にかけて海岸線に沿った平坦部だが、中山間地域においても立地条件を生かした独自の取り組みがなされている。

このような花き園芸が盛んであるという高知県の農業の現状と、豊かな自然を生かした観光を推進している観光業の現状を踏まえて、花を観光資源とした取り組みを提案したい。具体的には、県内各地（東部・中部・西部）で生産されている花もしくはゆかりの花を植えた「花公園」をつくる。その公園でフラワーアレンジメント教室やブリザーブドフラワーづくり、花皿鉢づくりなど花に関連したイベントを開催する。そうした景観やイベントを求めて観光客を集客し、公園作りやイベントでの販売で園芸農家の収入源も獲得する。このような花を観光資源とした観光は全国でも行われており、顧客ニーズを獲得しやすいと考えられる。

また、2015年に国連サミットで採択されたSDGsの目標のなかでも、「12 つくる責任つかう責任」や「15 陸の豊かさも守ろう」にも記載されているように、環境に配慮した産業の振興が求められている。そういった国際的な取り組みとも今回の提案は一致していると考える。

＜日本人学生のレポート③＞抜粋

私はこの授業を通じて高知県を様々な側面から見ることができた。この授業で学んだことや自分で調べたことをもとに地域活性化の提案をしていく。

まず、インターネット上で高知の伝統工芸品について気になるもの「くじらナイフ」を見つけた。このくじらナイフは子供用のペーパーナイフとして開発されたが、通常のナイフと違って形がくじらの形をしているので鑑賞用としても捉えられる。必需品ではないがこの製品に興味を持つ消費者たちがいた。

次に幕末志士についてである。高知県で特に有名な偉人として坂本龍馬が挙げられる。県内にも彼由来の観光地は多く、2019年には維新十傑と題した展示が行われていた。陸奥守吉行という坂本龍馬の刀を「刀剣乱舞」での陸奥守吉行の担当声優が音声ボイスをつとめ話題となった。

最後に高知県外でもイメージとして根強い酒文化だ。平成30年県外観光客入込・動態調査報告書によると高知県旅行者の平均的な滞在日数は二日である。これは、車で旅行に来た人も一晩宿泊しお酒を飲む可能性が高いということだ。高知県としてもナイトタイムエコノミーの増加について注目しており、滞在日数の増加や県内での消費の増加が見込めると考えられている。

私は今までに挙げた例に対して共通して感じたことがある。どれも万人ウケするものではないということだ。しかしそれは裏を返せば、一部の人間に対してとても有効であるということだ。つまり私は、高知県は特定の趣味を持つ人間に対して売り出すことを進めるべきであると主張する。多くの人間は趣味に対してお金を出すことをいとわない傾向があると考える。そして自分の趣味趣向を理解してもらうために良い側面を紹介し、他の人の興味を引くことを目指すと考える。高知県内ではすでに多くの観光客に対する整備が進んでいる。しかしながら、私の近辺での認知度は低く、旅行経験者が少なかった。それは他の四国三県と比べて距離が離れているということもありハードルが高いことが原因と考えられる。ではもし、遠方の土地が自分の趣味が存分に楽しめる土地であったらどうだろうか。滞在期間を少し長めに取り贅沢を行うのではないだろうか。そもそも高知県は外国人観光客の滞在期間中に消費する金額は他の県に比べて比較的に多い。そのことを踏まえ活性化案を考える。

一つ目は、他の伝統工芸品の現代的なデザインの導入だ。多くの地域で伝統工芸品は実用的な製品を除きお土産売り場の隅に追いやられているように思う。和傘や着物などの身に付けるタイプの製品は比較的レンタルなどでの人気が見られる。使われる工芸品と使われない工芸品間の差は、特別感があり日常的に関りがあるかというところから生まれると思う。古臭いものからおしゃれ品としての昇華ができた時伝統工芸品は新たな境地が迎えられると思う。

二つ目は、酒造の擬人化だ。現在「萌酒」という文化が作られつつある。これは高知県にとって追い風になるかもしれない。前例として前述した「刀剣乱舞」というコンテンツはアニメ化舞台化までなされている。刀と日本酒はそれぞれ日本文化、歴史を象徴するものであり、同様の潜在的な能力があると思われる。両者間での大きな違いは刀に比べ日本酒のほうがコレクションとしての入手が比較的に簡単であるというところだ。また「クールジャパン」として取り上げられる文化を取り入れることで外国人人気も望めるはずだ。

高知県ではすでに多くの観光に対する政策がとられており、SNSを利用した観光業を積極的に取り入れ県内産業に追い風が吹いているように思える。実際SNSで「室戸廃校水族館」や「仁淀川」について取り上げられた記事が多くの人の目に留まる場所に取り上げられている。それに対して伝統工芸品や

文化がどれだけ古臭いではなく、洒落ていて機能美があると感じさせることが鍵となると思う。

＜中国留学生のレポート＞抜粋

高知県は全国に誇る美しく豊かな自然に恵まれている。また、坂本龍馬や吉田茂など数多くの偉人を輩出してきた歴史と風土がある。しかし、高知県も現在、全国各地で発生している過疎化、少子高齢化の波に飲まれている。その人口は年々減少しているため、県内市場も急激に縮小しているだけでなく、平均求人率も全国平均に大きく引き離されている状況が続いている。このような状況から抜け出すために、経済の活性化に向けた根本的な対策が不可欠である。

高知県では平成21年度より、「地産外商」を戦略の柱に、経済の活性化に向けた様々な取り組みをスタートさせるという産業振興計画が実施されている。しかし、「地産外商」という戦略を推進するために、強みを十分に生かし、弱みを強みに転じることが重要である。

そこで、産業を振興させるために、どのように自分が持っている強みを十分に生かし、弱みを強みに転じることができるのかを詳しく説明したいと思う。

一番目は農業分野についてである。現在、高知県の農業が直面している問題は以下の通りである。第一に、高知県の平野面積率は16.3%で、農地が少ないことである。第二に、労働人口が減少していることである。第三に、生産農業所得が少ないことである。これらに対して、三つの対策が挙げられる。まず、耕地面積あたりの農業産出額を高める必要がある。そのため、環境制御技術の普及推進を加速しなければならない。例えば、現在、高知県は園芸農業先進国のオランダの先進技術を導入し、高知の気候条件やハウスの構造、栽培品目などに合わせて改良を重ね、進化させている。次に、自動的な生産技術を導入する必要がある。収穫時期予測、病害虫発生原因の推定、収量予測精度の向上などの新サービスを利用することができる。最後に、６次産業化を推進することである。生産者、加工企業、流通事業者などが一体となり、相互に連携しながら、高付加価値化を推進することができる。

二番目は林業分野についてである。高知県の森林面積率は84％で全国一である。どのように県内の優良な森林資源を十分に生かせるだろうか。まず、「森の資源」を余すことなく活用する仕組みを構築することが大切である。

例えば、低質材は木質バイオマスに利用され、良質材は大型製材工場の整備に利用される。次に、生産性向上による原木の増産と再造林の推進が不可欠である。最後に、付加価値の高い製品づくりも所得額に良い影響を及ぼす。

三番目は水産業分野についてである。近年、高知県では漁獲高の大幅な減少に伴う漁業者の高齢化や減少傾向が進んでいる。一方、漁協では、組合員数の減少による解散の危機、職員数の減少による漁協サービスの質の低下等の問題に直面している。そこで、これらの問題を解決するために、漁業体験などのサービス産業を本格化にすることが不可欠である。これによって、所得が向上するだけでなく、雇用の創出も漁業者の減少という問題も解決することができる。そして、高知県の風土や伝統的文化の保全にも利益がある。

四番目は観光産業分野についてである。観光客を誘致するためには、交通の便、歴史文化と自然の豊かさ、宣伝の方法などが重要である。そのため、SNSなどを利用し、県内の豊かな観光資源を県外や海外に宣伝する必要がある。そして、人材を育成することも不可欠である。観光客に良い印象を与えるために、観光地周辺の施設を完備することも重要である。地元ならではの旅行商品、例えば、「高知家」に関する記念品の開発により所得をあげることもできる。

五番目は防災関連産業分野についてである。高知県は自然災害の多発が予想されている。高知県の年間降水量は3,659mmで全国一位、台風上陸個数も全国一位である。そして、地震と津波への備えも必要である。災害多発県である高知県は防災関連産業に大きな力を入れなければならない。そして、防災や減災、災害現場で役立つオリジナルな製品や技術開発をして防災力の向上を図るとともに、防災関連製品の「地産地消」の取り組みを進めていき、防災関連製品や技術を国内外に販路拡大することに務める。

このように、各分野の産業振興を推進していくことができれば、県民生活の向上と経済の復興が期待できる。

＜台湾留学生のレポート＞抜粋

「産業・観光振興」に向けたSWOT分析

【Strengths 強み】 食べ物が美味しい 自然がたくさん残っている 海洋性の温暖で暮らしやすい気候 輝かしい歴史を持っている よさこい祭りの本場	【Opportunities 機会】 東京オリンピック 地方移住 よそ者の増加 インターネットやSNSの普及
【Weaknesses 弱み】 交通アクセスが不便 外国人の受け入れが少ない 知名度低い 情報発信力の不足	【Threats 脅威】 南海地震の恐れ 少子高齢化 地元の人材流出 シャッター通り

SWOT分析により三つの提案をしていきたい。

１.外国人の受け入れが少ない→海外大学生インターンシップ・プログラムの開催

例えば、鳥取県は交流事業の一環として、平成23年度より鳥取県海外大学生インターンシップ受入事業を実施している。台湾・香港の大学生たちが、約１ケ月間に渡り県内の旅館などでインターンシップを行う。

私もこのインターンシップに参加していた。日本の職場文化を体験できるだけでなく、鳥取県政府も海外の大学生の視点から観光の情報を発信していくことができる。それに、産業振興といった観点から見ると、県内観光関連施設のインバウンド力を向上することもできる。

２.知名度低い→アーティスト・イン・レジデンスプログラムや地元の音楽祭の開催

まず、香川県で開催する瀬戸内国際芸術祭を紹介する。瀬戸内国際芸術祭でも、アート・イン・レジデンスという取り組みが瀬戸内の島で展開された。アート・イン・レジデンスとは、アーティストの作品が開放され、自由に地域の資源や地形、文化に寄り添いながら表現できることだ。３年に一度なので、私も去年瀬戸内芸術祭に行ってきた。一番感じたのは、アーティストたちは作品制作を通して、そこに住む住民には発見できない地域の魅力をもたらしてくれることだ。しかも、地元住民だけでなく、瀬戸内国際芸術祭も海外の観光客を集めることに成功し、海外での知名度が向上し、香川県のブランド力も高まった。

そして、音楽祭については、台湾の覚醒音楽祭を例に挙げて紹介する。覚醒音楽祭は台湾の嘉義県で高校生たちの地元愛から始まっており、台湾でも珍しい地元密着型の音楽フェスティバルだ。音楽を聞くだけではなく、この

音楽祭は観光客として、ボランティアとして、そして地域住民として参加することによって、人々の新たな交流のきっかけとなった。また、こういう地元密着型の音楽祭を開催することは、地域のイメージアップとなる。

つまり、「アーティスト・イン・レジデンスと音楽祭」を考えるとき、単なる文化イベントを開催するのではなく、「産業振興」や「観光振興」、「国際交流」といった課題も取り入れ、高知県の知名度を向上していく。

３.情報発信力の不足→ローカルインフルエンサーや海外のインフルエンサーの起用

SNSで影響力のある人は「インフルエンサー」と呼ばれている。SNSで観光情報を発信する際、知名度の高いインフルエンサーに頼った方が有用であり、フォロワー数が多いほど影響力が高くなり、拡散力も高くなることがわかった。特に、地域に詳しいローカルインフルエンサーは自分の住む地域の特色をよく知っているので、PRをしてもらえる可能性が高い。

現在、若者を中心にSNS（特にインスタグラム）を利用して、旅行先を決定する人がどんどん増えている。このようにインスタグラムを利用して、海外にも発信を行い、海外の観光客を増やすことができる。

付記

本活動は、国際連携推進センターの運営費交付金を活用し、実施された。なお、学生アンケート及びレポートの文章は、読みやすいよう授業担当者による修正を施した。

参考文献

林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ（2018）「留学生と日本人学生の共修による地域文化理解・地域交流を柱とした体験学習型授業の構築」『高知大学留学生教育』第12号、pp.23-43

林翠芳・大塚薫・ガルシア デル サス エバ（2017）「体験学習を通じたアクティブ・ラーニング型授業の構築」『高知大学留学生教育』第11号、pp.77-90

宮本美能（2015）「留学生と日本人学生の国際共修授業における一考察：言語の問題へのアプローチと学習効果」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』41、pp.173-191

大塚薫・林翠芳（2019）「インタビュー活動による地域住民との交流を主軸とした体験学習型授業の構築 ―国際共修による双方向往来の学びを通して―」ウェブマガジン『留学交流』2019年９月号 Vol.102 pp.13-24

大塚薫・林翠芳（2019）「国際共修による地域文化体験型授業の構築―インタビュー活動を通した地域住民との交流を主軸として―」『日本語教育研究』第47輯、pp.127-146
大塚薫・林翠芳（2018）「高大連携による地域文化体験を通した交流学習活動の教育効果―地域文化理解を目的とした高校生と留学生との交流を主軸として」『高知大学留学生教育』第12号、pp.45-77
大塚薫・林翠芳（2018）「インタビューによる地域住民との交流を主軸とした体験学習型授業の構築」『第23回JAISE年次大会（研究大会・総会）proceedings』pp.#32-5-1-2
大塚薫・林翠芳（2017）「グローバルな視点に基づいた体験型プログラムの構築―地域文化・観光体験調査の結果を通して―」『韓国日本語学会第35回国際学術発表大会論文集』、pp.115-120
大塚薫・林翠芳（2016）「日韓中協定校体験型プログラムの実践と課題―高知文化事情に触れる体験を通して―」『韓国日本語学会第33回国際学術発表大会論文集』、pp.100-105
佐藤勢紀子・末松和子・曽根原理・桐原健真・上原聡・福島悦子・虫明美喜・押谷祐子（2011）「共通教育課程における『国際共修ゼミ』の開設：留学生クラスとの合同による多文化理解教育の試み」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』第６巻、pp.143-156
島崎薫（2018）「地域住民との国際共修で留学生は何を学んだのか―仙台すずめ踊りの実践を通して―」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第４号、pp.397-406
島崎薫（2017）「地域住民との国際共修―留学生のアイデンティティの変化に着目して―」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第３号、pp.227-237
末松和子（2014）「キャンパスに共生社会を創る―留学生と日本人学生の共修における教授法の確立に向けて―」ウェブマガジン『留学生交流』Vol42、pp.11-21

LIN Cuifang
（高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門教授）
おおつか　かおる
（高知大学国際連携推進センター国際連携教育部門准教授）
GARCIA del Saz Eva
（高知大学国際連携推進センター国際プロジェクト部門助教）